ゲノムに触って！
ゲノムで感じて！

ゲノム研究 勢ぞろい！

in京都
Kyoto

来場者の声

- 自分が思っているよりゲノムの多様性があるのを感じました（15歳・女）
- 予想以上にハイレベルの展示ばかりで驚いた（21歳・男）
- これから発展していく学問なので、定期的に開催して欲しいです（22歳・男）
- このように一般に開かれた研究方法を今後多くの研究者が採用していく事を期待します（37歳・女）
- 企画そのものがすごいと思いました（40歳・女）
- また開催されるのでしょうか?ぜひもう一度、生徒も連れて来たい（42歳・男）
- DNAをとても身近に感じました（49歳・女）
- どんどん研究が進んで人間に役立つ事を期待しています（64歳・女）

京都会場の報告

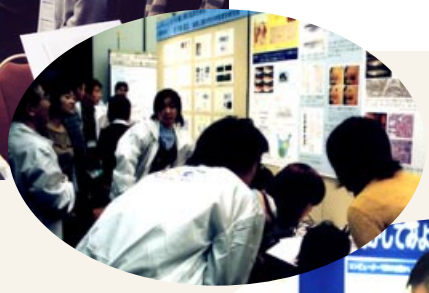
小笠原直毅（奈良先端科学技術大学院大学教授）
加藤和人（京都大学人文科学研究所助教授）

今回のゲノムひろばの広報については、全体で一括して行なったプレスリリース（2002年9月13日に文部科学省記者クラブで小原代表が発表。同時に全国400ヶ所の報道・出版関係に情報を送付）に加えて、各会場に合わせた広報を行なった。京都会場では、近畿各府県の高等学校にポスターとちらしを送付。京都新聞には個別に記事掲載の依頼を行った。京都市の後援を取り、担当窓口経由で京都市内の公共機関、公立図書館、全小中学校にポスター等を送付してもらった。さらに、京都市交通局にも協力を依頼し、本番前の約10日間、京都市営地下鉄の全27駅に無料でポスターが掲示された。ただし、こうした広報活動がどれくらい効果的であったか、例えば実際に公立図書館がポスターを掲示したかどうかは確認できていない。また、学校には教育委員会からの通達も効果的なようで、こうした点を次回には検討していきたい。

当日は、会場の都合で平日（22日）と祝日（23日）という日程になったこともあり、1日目は来場者の出足がやや悪く、年齢層としても高かった。けれども2日目には他の会場と同様に多数の来場者があり、高校生や家族連れなども訪れ盛況であった。展示の内容についても、ホヤ、線虫、メダカなどの生物から、バイオインフォマティクスのコンピュータディスプレイ、医科学での蛍光in situでがん細胞の染色体を見せる展示など、具体的展示物が充実していたと思う。ポスター展示の内容も、最後の会場ということで、他会場の経験をもとに工夫がなされていた。

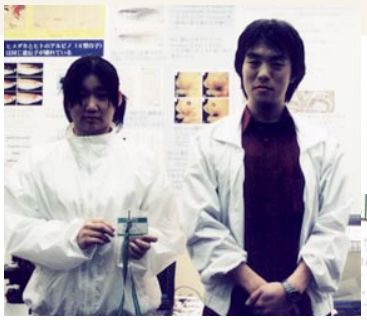
問題点としては、やはり日程に平日が入ったために高校生や学生、一般社会人が参加しにくかったことが挙げられる。会場のレイアウトについても難があった。東京や福岡と異なり、基本的情報の解説のための「そもそもゲノム」が奥まったところにあり、基礎知識の少ない来場者がいきなり勢ぞろいの展示を見て、「難しい」と感じたのである。会場が狭かったのも他の2会場と同様であり、さらには観光シーズンと重なって展示参加者のホテルが取れない、新幹線が一杯といった問題もあった。いずれも次回に向けて工夫の必要があると思われる。

とは言え、京都会場においても、当初の目標である1,000人（2日間）の来場者を達成し、十分に熱気に満ちた催しになった。工夫を凝らした展示を用意し、熱心な解説をして下さった出展者の方々、そして、会場との交渉・設営から当日の電源の手配まで、あらゆる面で支えて下さったゲノムひろば事務局の方々に心からお礼を申し上げたい。

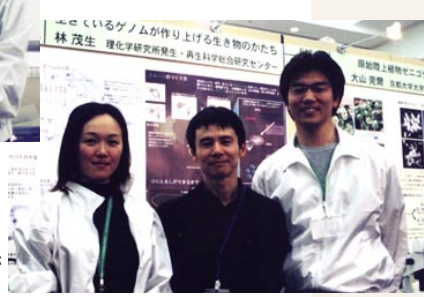


■来場者人気投票の結果

1位　C-10　枯草菌の胞子はどのように作られるのか



2位　A-3　ヒト疾患モデルとしての
メダカ:比較ゲノムの視点から



3位　B-18　生きているゲノムが
作り上げる生き物のかたち

研究者の声

- こんなにたくさんの人が来るとは正直思っていなかった
- 間違ったイメージを与える恐さを、これまでに無いくらいに感じた
- 広い意味で研究者として見られることに責任を感じました
- 話の一つ一つに素直に反応してくれたことがすごく新鮮、今時の高校生もまだまだ捨てたもんじゃない
- 参加した研究者の間でも何か団結心のようなものが生まれた
- 話の切り上げ、見極めが難しい。フーテンの寅さんの苦労がわかった
- 説明するには幅広い知識が必要で、深くも浅くも知っていなくてはならないと思った
- 多種多様なゲノム研究者が一同に会したことに、壮観さを感じた
- 個々の研究室が、それぞれの個性を発揮しているところが印象深い
- 大学祭みたいで楽しく、学会のポスター発表とは違った雰囲気づくりに成功したと思う

3位　C-11　細胞の誕生を探る